

三重建築学生合同課題発表会2022

去る12月10日の土曜日「三重建築学生合同課題発表会2022」を開催しました。昨年に引き続き2回目となる今回は、前回のアンケート結果、反省会（懇親会）で出た意見等を取り入れ、会場構成や内容に変更を加えて行いました。会場は前回と同じレーモンドホール（三重大学キャンパス内）ですが、席の並べ方、課題作品の見せ方、発表の手法などを工夫し、会場にいる全員が講師者としてできる限り同じ情報を共有できるよう努めました。そして指導された先生方から各大学（三重大学、三重短大、近大高専）の課題の主旨説明をいただき、講師者と参加者がそれを理解した上で、発表会をスタートさせました。

発表者は三重大学から3名、三重短大から5名、近代高専から4名の計12名で全員が大学2年生相当の学生で、各校課題の優秀者で構成されています。講師者はゲストクリティックとして、建築家の大室佑介氏をお招きしました。氏は卒業設計日本一決定戦（せんだいデザインリーグ2005）日本一に輝いた実績をお持ちで、現在三重と東京を拠点に建築設計のお仕事をされています。

また、ご自身が設計した私立大室美術館の館長としての顔もお持ちで、既存の枠にとられない建築家として注目の存在です。これから卒業設計に臨む発表者達にとって氏の意見を聞く機会はこれ以上望むべくもないものだと思います、お忙しいところ無理を言って参加いただきました。そして三重地域会から森本雅史地域会長と高瀬元秀会員に登壇願ひ、コーディネーターは久安典之会員に務めていただきました。

課題は三重大学が「公園に隣接するオープンキッチンハウス」、三重短大が「コミュニティセンター」、近大高専が「学生寮+地域交流施設」と、もちろん敷地・用途・規模もバラバラで、かつ各校の教育課程が異なるため、建築設計についての習熟度もかなり差があるという、発表する側も、講師する側もなかなか難しい状況であります。したがって、作品の優劣をつけるのではなく、それぞれの課題を、どう理解し、どのように解いたか。プレゼン資料の出来云々ではなく、どうイメージして、どのようにデザインしたか。云うならば、顕在化した作品についてではなく、学生の持つアイデアやポテンシャルにつ



いて表現し、論じる場になっている、また、そういった内面を見極める能力も求められる、そのような発表会となりました。これは一般的な学生コンペ等とは少し違う役割と価値のあるものになりつつあるのではないかと、いやそうすべきだと、その場で繰り広げられる光景を見つめながら考えていました。

すべての発表と講評が終了した後、最後にゲストの大室氏より、総評と学生に向けてのアドバイスをいただいたのですが、そこで「粘土」という印象的なワードが発せられました。「粘土」は捏ねていると柔らかさを保っているが、捏ねることをやめると固くなってしまふ。建築も同じで、常に捏ねることが大事で、怠るとアイデアやデザインがカチカチになってしまう。学生の間にひたすら捏ねて柔らかさを身に付けておかないと、実社会に出るとどうしても固くなってしまふ。将来幾分でも柔らかさを残すために、今はグニャグニャで良いんじゃないか。この言葉には参加した学生だけでなく、その場に居合わせた全員が何かを感じたのではないのでしょうか。とても有意義な時間を過ごし、会場を後にしながら、来年以降も更に内容を充実させ、この発表会を続けて行こう、そう思う一日となりました。



出口 基樹 (JIA三重)
日新設計

